

## 73 地雷被災者を中心とした障害者総合リハビリテーション体制強化プロジェクト 終了報告 -センターの果たした役割-

1) 健康増進センター 2) 病院眼科 3) 企画課 4) 国際医療福祉大学大学院  
飛松好子<sup>1)</sup>、仲泊 聡<sup>2)</sup>、西田朋美<sup>2)</sup>、通島尚子<sup>3)</sup>、西村陽子<sup>3)</sup>、岩谷 力<sup>4)</sup>

### 【はじめに】

2008年8月25日に始まった「地雷被災者を中心とした障害者総合リハビリテーション体制強化プロジェクト」が2012年8月24日をもって無事終了した。国際協力はセンターの事業の重要な柱の一つであり、リハビリテーション分野の海外協力においてセンターの果たした役割は大きいと思われる。しかし、センター内においては、見学者への対応や、派遣によるスタッフの一時的不在など、現場の仕事が滞ったり、周囲の負担が増したりと、必ずしも歓迎されているわけではない。センター全体にそのプロジェクトの意義が十分理解されていないこともその一因と考える。

### 【プロジェクト概要】

本プロジェクトの獲得目標は4つあったが、国立障害者リハビリテーションセンターが関わるのはそのうちの1. 機能回復リハビリテーションの技術の改善、2. 総合リハビリテーションに必要な「リハビリテーション総合実施計画票」や「診察手順書の整備」であった。投入した日本円は総額14億超（報告書からざっと計算）、投入した日本からの人材は、長期専門家が4名、短期派遣の専門家が延べ15名で、国立障害者リハビリテーションセンターからは岩谷力、仲泊聡、飛松好子が延べ12回派遣された。コロンビア人の本邦研修（日本での研修）は4回あった。1回は震災のためにキャンセルされた。当センターでの研修以外にも、仲泊聡、西田朋美、飛松好子は見学先に同行し、様々な質問に答えるなど、研修の充実に努めた。

### 【プロジェクトの特徴】

このプロジェクトの特徴は、カウンターパートが複数あること、複数都市に亘ること、行政が関わっていること、などである。複数の機関が関わっていることから、話がなかなかまとまらない一方で、徹底した討論が行われ、実行に移された。カウンターパートに政府機関が含まれていることから、成果は地方自治体や国家施策にも影響を与えた。

一方で、遠方であることも手伝って、1回の派遣期間が長く、3都市を回り、複数の施設を訪問し、視察し、討論し、必要に応じて講演をし、講義をし、と盛り沢山であり、時差もあって、当事者の負担は大きかった。

### 【プロジェクト成果の定着性】

政府の主導により今後の定着も確実である。実際11月末には、現地政府からの招聘で、岩谷力が招待講演に出向いている。

### 【センターにとっての意義】

センターにとっては、国際協力の一環としてのプロジェクトを完結させたこと、センター病院のリハビリテーションの特徴であるデータベースを使ってデータを蓄積しつつ、リハを進めるやり方やオンライン化したデータの表示に基づくカンファランスの進め方、およびセンター眼科の特色であるロービジョンリハビリテーション、視覚障害のリハビリテーションをコロンビアに移植したことは、国際協力とともにセンターのリハビリテーションを一つのモデルとして他に移植したということでありその意義は大きい。